

I 大むかしの土佐のくらし

(1) かりと漁のくらし

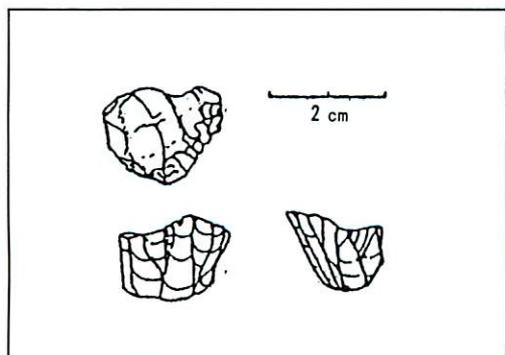
土佐のあけぼの 高知県では、いつごろから人々がくらしはじめたのでしょうか。

県西南部の遺跡からは、ナイフ形石器（ナイフ状の石器で、調理加工用具）が、また、高知市介良の高間原からは細石核（もりや小刀として使った細石器を作るための加工石）が発見されています。また、南国市でも、1996（平成8）年の発掘調査により、奥谷南遺跡（岡豊町小蓮）の岩かげから、多くのナイフ形石器や細石核・細石器などが発見されました。

これらの石器は、今から1万2千年以上も昔の旧石器時代のもので、このころから、人々が生活していたと考えられます。

岩かげやどうくつに住んだ人々 仁淀川の上流、四国山地のなかにある愛媛県美川村の上黒岩で、1961（昭和36）年石灰岩の岩かげを掘りおこしているうちに貝がらや土器・石器などを発見しました。

奥谷南遺跡の岩かげ



高間原山から出た細石核



そのなかに、縄文草創期（今からおよそ1万年前）の日本で最も古い種類の土器や有舌尖頭器などがありました。発掘品のなかで最も注意を引いたのは、やりのささった人間の腰骨と大きさ5cmぐらいの河原石でつくられた8個の線刻女性像（女神石）でした。

やりのささった人骨は、かりをしていた時にあやまって仲間がさしたのか、それとも何かのあらそいでやられたのか。どちらにしても、この傷がもとで死んでしまったと思われ、人骨発見当时には「なぞの殺人事件」とさわがれました。

女神石といわれる線刻女性像の石は、日本でもめずらしい発見です。原始時代の人びとは、子どもを生む女性を石にきざむことで、子どもがたくさん生まれ、かりや採取にもめぐまれると考えたのでしょう。

岩かけ遺跡のなかから発見される貝がらの種類から考えると、上黒岩に住んだ人々は、一日がかりで四国山地を下り、瀬戸内海や土佐湾へ貝をとりに行っていたと思われています。

線刻女性像（女神石）

貝製品



上黒岩岩かけ遺跡
（愛媛県美川村）





ヤリのささった^{こしぼね}腰骨



縄文時代初期^{じんこつ}の人骨

高知県内でも縄文時代^{じょうもん}になると、人々は吉野川^{よしの}や仁淀川^{によど}、四万十川^{しまんど}のそばの小高いおかにある自然にできたどうくつなどを見つけて住み始めました。

上黒岩^{かみくろいわ}岩かげ遺跡^{いせき}で発見された女神石^{めがみ}とよく似た石が、大宮・宮崎遺跡^に（四万十市大宮）から発見されました。この遺跡は、縄文後期（今からおよそ3,500年前）のものです。

佐川町^{さかわ}の不動ヶ岩屋^{ふどうがいわや}どうくつ遺跡^{いせき}からは、縄文草創^{そうそう}～早期^{そうき}（今からおよそ6,500～9,000年前）の土器や石器、しかの骨で作った道具、貝で作ったそう身具^{しんぐ}などがでてきました。

縄文前期（今からおよそ5,000～6,500年前）の土器や石器は、佐川町の城の台^{じょうだい}どうくつの遺跡から発見されました。ここからは、石のやじり、たたき石⁽⁴⁾、いのしし・おおかみ・しか・犬などのけもの骨、そして、おおかみにかまれたあとのある大人^{おとな}の男の人の骨が1体でてきました。

不動ヶ岩屋どうくつ遺跡（佐川町）

佐川町の遺跡があったあたりは、当時原始林におおわれ、おおかみにおびえながらも、かりをするのに適^{てき}した場所だったと思われます。人々は同じ場所に長い間住むことはな



く、えものがいなくなったり、きけんになったりすると、えものを求めてまた新しい場所へと移っていきました。

海辺に住んだ人々 じょうもん 縄文

後期（今からおよそ3,000年前）になると、台地に住んでいた人々は、貝や魚をとるのに便利なうえ、かりも



貝がらの散在する畑（宿毛貝塚）

できるような海や川の近くへと移り住むようになってきました。

このころの遺跡として、宿毛貝塚があります。ここは、それぞれ東側と西側の2つの貝塚があり、縄文人が採集して捨てた貝がらが散布しています。この遺跡から、あさりやはまぐりなど海に住む貝、にはんしじみなどの川やぬまに住む貝など約25種類の貝ができました。このほか、いのししやしかの骨、たいなどの魚の骨、石錘（魚をとるときのあみのおもり）、石斧（木などをたたき切る道具）、石皿の破片や多数の縄文土器ができました。そのうえ、真っすぐにねたようなすがたの45～60才ぐらいの女の人の骨が1体と、頭部の骨だけのものが2体でできました。

この貝塚のあるあたりは、湾が深く入りこみ、小高いおかになっていました。人々は台地のくぼ地を選び、その周辺に住んで、山に行ってもものや木の実をとったり、海や川では貝や魚をとったりしてくらしていたことがわかります。

南国市では、岡豊町小蓮・定林寺や田村などで、縄文後期の集落跡が発見されています。

岡豊町小蓮の奥谷南遺跡からは
 ドングリをためておく穴（貯蔵穴）
 が3つ、その他矢じり、石斧、石
 錘などが発見されています。



ドングリ穴からざくざくと
 (奥谷南遺跡)

縄文遺跡の分布図

- △ 旧石器時代のナイフ形石器・細石核出土地
- 主要遺跡
- × その他の遺跡



- 注(1) 細石器 長さ2～3cm、幅2～5mmのカミソリのような石の刃をたくさん作り、みぞをほった木や骨・角にはめこんだり、松ヤニなどでつけたもので、もりや小刀として使った。
- (2) 旧石器時代 土器が製作・使用される以前、石器だけを使っていた時代のこと。
- (3) 有舌尖頭器 投げやりの先につける石のやり先
- (4) たたき石 木の実をつぶしたり、粉にししたり、石をたたいて破片を作ったりするときに使ったと思われる石器。